

5. 関ヶ原の戦いは朝鮮の役の遺恨の決着戦

慶長3年(1598年)8月18日の秀吉の死に伴い、五大老は朝鮮からの撤退を決定し、9月初旬加藤清正ら朝鮮在陣の武将に、秀吉の死は伏せて速やかに明・朝鮮と和議を結んで帰国するよう指示を出します。和議の条件は、明・朝鮮側が朝鮮王子を人質に出すことおよび日本に貢物をするのですが、状況によっては貢物だけでもよいとなっていました。秀吉の死は、遅かれ早かれ明・朝鮮側も知るところとなりますから、実質安全に撤退できればなんでもよかったと思われれます。そのころ明・朝鮮連合軍は、日本側の守勢を見て、東路・中路・西路と水路から日本軍を総攻撃する決定をします。

まずは9月19日西路軍と水路軍が小西行長や松浦鎮信らが守る順天城へ攻撃を始めますが、順天城は堅固な作りとなっており、落とせません。一方中路軍は、9月27日より島津義弘が守る泗川固城・新城を約3万7千人の兵で攻撃しますが、島津軍の巧みな戦い方により、壊滅的敗北を喫します。この敗北が順天に伝わり、10月7日西路軍は、一旦順天城から後方に撤退します。10月下旬順天城の小西のもとに撤退指示の使者が到着し、小西軍も撤退の準備に入ります。しかし小西は、五大老から当初指示があった条件を成立させるべく明の西路軍都督に働き掛けます。明の西路軍都督も厭戦気分になっていたため、交渉に応じ、人質と贈物の交換が実現します。そこで、小西は、同じ朝鮮半島南部西側の倭城(泗川城・固城・南海城)を守る左軍の島津義弘・立花宗茂・宗義智らと撤退する手筈を決めます。これにより島津らは、守城を焼き払い待ち合わせの巨濟島に移動し、小西軍を待ちます。ところが小西軍は、和議に関与していない水路軍に巨濟島へ移動する海路を封鎖されてしまいます。これを聞いた島津らは、小西救援のため水軍を編成し順天城に向かいます。これを知った明・朝鮮水路軍は、順天城沖の海上封鎖を解き、露梁津で島津らの水軍を迎え撃ち、海戦となります。その間に小西は、戦域を避け巨濟島に無事到着します。そして、遅れて巨濟島に帰還した島津らと釜山浦に向かい、11月25日釜山浦を出港し日本に帰国します。

一方清正守る蔚山城は、9月20日から東路軍約3万人の包囲・攻撃を受けます。守る清正軍は約1万人です。今回は蔚山城の防備は完璧で、籠城・撃退する準備が整っていたため、東路軍は繰り返し攻撃するも落とせず、被害だけ拡大したことから、10月4日撤退します。その後10月初旬、清正らは秀吉死去と和議の上撤退するよう伝える使者を迎え、撤退の準備に入ります。さらに清正は、11月半ばには家康から、黒田長政と相談し速やかに撤退するようにとの書状を受け取ります。これを受け、清正・黒田・浅野幸長ら東側の倭城を守る右軍は撤退を開始し、11月21日釜山浦に到着し、23日釜山倭城を焼き払い、釜山浦を出港します。小西らが釜山浦に到着した23日には、釜山倭城は焼き払われていたことから、小西らは恨みを持つこととなりました。

このようにして、朝鮮を撤退した諸武将は、12月初め博多に到着します。待ち受けた石田三成は、清正らに、「このまま国に帰り軍装を解かれよ。来年早々伏見で茶会などを開いて戦陣の苦労を慰労しよう」と言ったことから、三成に恨みのある清正らは、三成への恨み

を増幅します。

清正は7年に渡り朝鮮で戦っており、帰国後清正が行った熊本城築城、七将襲撃事件、東軍に参加した関ヶ原の戦いは、朝鮮の役の影響を強く受けています。また、家康が行った関ヶ原の戦いの論功行賞と島津との講和も朝鮮の役が大きく影響しています。

(1) 熊本城築城

熊本城の築城開始時期については、当初関ヶ原の戦い後の1601年という説が有力でしたが、今では1598年から築城が開始されたという説が有力になっています。その最大の根拠は、関ヶ原の戦いにおける東軍、西軍が九州で戦いを繰り広げ、慶長5年(1600年)11月筑後の久留米藩と柳河藩を開城させた後、薩摩に向かう東軍の黒田如水が熊本を通る際に、熊本城の天守閣でもてなす準備をするよう命じた清正の書状にあります。即ち、慶長5年(1600年)11月頃には熊本城の天守閣はほぼ完成していたことになり、それ以前に築城に取り掛かっていたことになります。そのため築城開始時期は、秀吉死去を知った直後であろうと言われていています。秀吉が死去し朝鮮から撤退することとなると、攻守所を変え、明・朝鮮軍の追撃、日本への侵攻が予想されます。その場合に明・朝鮮軍が九州に上陸し、熊本まで侵攻することも予想されたため、援軍が来るまで長期間籠城し戦える巨大で強固な熊本城を築城したと思われまます。慶長2年(1597年)12月の第1次蔚山城籠城戦で食料や水不足で死地に瀕したことから、熊本城内には実が食料となる銀杏を多数植え、120の井戸を掘り、城内の建物の土塀には干瓢を塗り込め、畳床に芋茎を用いるなどの対策が施されています。熊本城を薩摩への備えという説がありますが、清正は当時の薩摩をそれほど強敵とは思っておらず、周囲に黒田、鍋島、細川などがいることを考えれば、薩摩への備えとしてなら、これほど巨大で強固な城は必要ありません。熊本城は、明・朝鮮軍が第1次蔚山城籠城戦のように5万を超える兵で侵攻してきた場合の備えと考えたと、徳川家康が築城を見逃したことも理解できます。熊本城は、薩摩への備えではなく、秀頼を迎え徳川幕府と戦うことも全く想定されていません。ひたすら、明・朝鮮軍の侵攻に備えた城です。7年間も朝鮮で戦い、明・朝鮮の大軍に包囲され、明の強大な国力を知っている清正の頭は、どうしたら来るべき明・朝鮮軍の侵攻に対処できるかで一杯でした。この清正の考えには、家康も同意せざるを得なかったのです。

(2) 七将襲撃事件

清正や浅野幸長、黒田長政らは、帰国して博多で待ち受けた三成の言葉を聞いて、「三成許さじ」の気持ちを強くします。その中心人物は清正であり、それに朝鮮で生死を共にし、秀次事件では三成の報告により能登配流となった浅野幸長、第1次蔚山城籠城戦の後、三成一派の軍奉行の報告により、不合理な処分を受けた蜂須賀家政、黒田長政が加わります。蜂須賀家政、黒田長政が三成に恨みを持った事件は、こうです。慶長2年(1597年)12月22日から始まった第1次蔚山城籠城戦は、慶長3年(1598年)1月2日に釜山浦城などから毛利軍などの救援部隊が駆けつけ、明・朝鮮の包囲軍を追い払い、同1月4日に終了します。ここで、救援軍の武将らは、蔚山城が釜山浦城から約50km離れ、救援に時

間がかかったことから、同じような問題を抱える順天城、北に突き出た梁山城とこの蔚山城は放棄し、拡大し過ぎた守備領域を縮小すべきという意見を出します。蔚山城を抱える右軍の大將毛利秀元は当初反対しましたが、救援を受けた立場から、救援に来た総大將宇喜多秀家らに押し切れ、最後には同意します。そこで、この通りに決定し、この案に同意した13名の武將が連署した書面を作成し、秀吉に報告します。すると、この連署状を見た秀吉は、烈火の如く怒り、決定を認めず、連署状に署名した武將を、臆病者と叱責します。そして、署名した総大將の宇喜多秀家や右軍大將毛利秀元の責任は一切問わず、3番目に署名があった蜂須賀家政を重く処分します。蔚山城籠城戦終了後に帰国した軍目付福原長堯ら3名が、救援軍が到着した後先手当番だった蜂須賀家政と黒田長政は積極的に合戦しなかったと報告したことと合わせて、蜂須賀家政1人を臆病者であるとして、帰国・蟄居・一部領地召し上げ処分とします。総大將宇喜多秀家は元秀吉の養子であり、右軍大將毛利秀元も大老毛利輝元の嗣子であり、かつ26歳と19歳と若いことから、40歳と年長者で家格が低い蜂須賀家政を見せしめに処分したものとされます。このとき、黒田長政は、連署状には署名していませんが、先手当番でありながら積極的に合戦しなかったという理由で、名指しで叱責されたようです。この報告を行った福原長堯が三成の妹婿であり、他の2名(熊谷直盛、垣見一直)の軍奉行も三成一派と目されていました。この3人は、この後この報告の報奨として、領地の加増を受けたことから、本件処分の黒幕は三成と見られることとなりました。

なお、蔚山城を造り籠城した清正や浅野は、蔚山城放棄の連署状には署名していません。蔚山城を築城し、命がけで守った清正や浅野は放棄したくなかったと推測されます。しかし、救援を受け助けられた身では反対とは言えず、自軍が属する右大將毛利秀元が同意したことから、逆らえなかったものと思われます。小西が守城の順天城放棄に反対し、あくまで放棄しなかったことを考えると、序列を尊重し、秩序を乱すまいとする清正の性格が伺われます。本件の秀吉の叱責は、清正や浅野の本心を汲み取った秀吉が、2人のために行った行為とも考えられます。(堺市にある資料によると、清正は蔚山城放棄に反対する書状を密かに秀吉に出していたようです。)

清正は、連署状に署名していませんから、叱責の対象ではありませんでしたが、救援部隊の到着後真っ先に救援に飛び出した毛利軍吉川広高を饗応したとして、福原長堯らから軍紀違反と指摘されて、譴責されています。救援部隊では、遅れて到着した立花宗茂の活躍もよく言われるところであり、秀吉としては、豊臣直系の清正や浅野が危機にあるにも関わらず、同じく豊臣直系である蜂須賀や黒田よりも、傍系である吉川や立花が活躍したことが我慢ならず、蜂須賀の重い処分に至ったのかも知れません。

七将襲撃事件には、この朝鮮の役がらみで三成に恨みを持つ4人に、1595年に起きた豊臣秀次事件で三成に恨みを持つ細川忠興、福島正則、藤堂高虎の3人が加わったと思われます。細川忠興は、豊臣秀次を謀反の疑いで調べていた三成から、秀次から借入を行い借用証を差し入れていたことから秀次の謀反に加担しようとしていたと疑われ、絶体絶命の危機に追い込まれました。このとき忠興は、家康から資金を借りて返済し、危機を脱します。

福島は、1592年文禄の役で出兵していますが、1595年には帰国して、秀次事件では、高野山に入った秀次に切腹を伝える上使を勤めています。福島は、秀吉の母の姉妹の子と言われており、秀次は秀吉の姉の子ですから、血の繋がりががあります。2人の仲については良く分かりませんが、秀吉が決めたこととは言え、三成が担当していた秀次事件で、なぜ自分が切腹を命じる使者を務めなければならないのか、不満があったのではないのでしょうか。この後福島は、従五位下から侍従に昇格し、尾張清洲22万石の大名になっていますので、秀吉の中では、内局のトップは三成、軍のトップは福島という位置付けになっていたように思われます。しかし、福島の実際の役どころは、三成の筋書きに沿って秀吉が決めたことを実行する役割であり、実質的には三成の風下に立つことになります。福島は、この状態が面白くなく、三成襲撃に加わるようになったと推測します。

そして最後に藤堂高虎です。高虎は、文禄の役・慶長の役とも水軍奉行として参加しています。文禄の役の際には、当初李舜臣に連戦連敗し、加藤嘉明とともに秀吉から叱責されています。また高虎は、第1次蔚山城籠城戦後13名の武将による3城放棄の連署状に名を連ね、秀吉の叱責の対象になっています。この件では、高虎は叱責されただけで、具体的な処分はなかったようなので、これが高虎が三成に恨みを持つことになった原因とは考えられません。高虎が三成に恨みを持ったのは、豊臣秀次事件の前に起きた豊臣秀保死亡事件とその後継問題からではないかと推測します。大和郡山藩主豊臣秀長の養嗣子秀保は、慶長2年(1597年)5月、17歳のとき病気療養中に死亡したとされていますが、兄の関白秀次は、その3か月後の8月に切腹を命じられ、その後秀吉は、秀次の眷属39名を処刑しており、秀次一族の殲滅を謀っています。この経緯を考えると、秀保の兄の秀次切腹、眷属処刑に先立って、120万石の領主で巨大な軍事力を有し、秀次と結び反乱を起こす可能性がある秀保を、前もって消しておこうと考える者があって、暗殺したのではないかという疑いが湧いてきます。高虎は、秀長の右腕的存在であり、秀長死去後は、後継秀保を後見していました。秀長は、秀保を嗣子にする前に丹羽長秀の3男仙丸を養子にしておき後継と考えていましたが、秀吉が姉どもの3男である秀保を後継とするようねじ込みます。そこで高虎は、仙丸を自らの養子として引き取ります(藤堂高吉)。高虎は、秀保死去後、高吉を秀長家の養子に戻し秀長家嗣子とし、秀長家を存続させるよう秀吉に働きかけたようですが、認められませんでした。そこで、秀長家は改易となり、高虎は出家し高野山に入ります。高虎は、この一連の出来事に三成が絡んでいると考えていたのではないのでしょうか。ここに高虎が七将襲撃事件に加わることとなった原因があると推測します。なお、高虎が高野山に入った後、熱心に招聘に動いたのが徳川家康です。七将襲撃事件には、七将の中に、七将と家康を繋ぐ、家康の信頼が厚い武将が不可欠です。秀次事件の際、秀次への借入金を家康に用立てて貰った細川忠興も、その後家康に傾斜していますが、徳川幕府での高虎の取立てられようを見れば、家康の高虎への信頼の厚さが分かります。従って、高虎が七将と家康を繋いだ七将の1人だと思われれます。

福島正則・藤堂高虎に代えて池田輝政・加藤嘉明とする著述も見られますが、疑問です。

池田輝政は、朝鮮には出兵しておらず、朝鮮の役で三成に恨みはありません。秀次の正室は輝政の妹だったことから、秀次事件で三成に恨みがあったことは考えられますが、秀次の切腹後秀次の眷属 39 名が処刑された中で、その妹だけは助かっています。従って、三成に恨みを持つより感謝したとも考えられます。また、輝政の正室は家康の娘であり、奉行の三成を襲撃する事件に輝政が加わることを家康が許すはずがないと思われまゝ。一步間違えれば襲撃者は全員切腹ですから。従って池田輝政はないと思われまゝ。

加藤嘉明ですが、朝鮮の役には、水軍奉行として参加しています。文禄の役の際、当初李瞬水率いる朝鮮水軍に連戦連敗し、秀吉から叱責されたようですが、これが三成を殺したいほど恨みを持つ原因にはならないと思われまゝ。清正が讒訴され帰国させられたことを恨んだという説もありますが、嘉明と清正は朝鮮で一緒に行動しておらず、また取り立てて仲が良かったという話もありませんから、ピンときません。それに、七将襲撃事件に加わった清正、黒田、福島、蜂須賀は、家康と婚姻関係を結んでいます、嘉明は結んでいません。従って、加藤嘉明も違うと思われまゝ。

池田輝政と加藤嘉明は、関ヶ原の戦いに参戦していたことから、七将のメンバーとされたとと思われまゝ、七将襲撃事件は、関ヶ原の戦いよりも前に起きた事件であり、順序が逆です。

ちなみに、徳川家康の書状にある七将は、清正、浅野、黒田長政、蜂須賀家政、細川忠興、福島、藤堂高虎です。

(3) 関ヶ原の戦い

関ヶ原の戦いは、七将襲撃事件の延長戦という側面があります。関ヶ原の戦いは、当初から計画されたものでなく、家康の上杉景勝討伐から転じ、本筋となった戦いです。従って、上杉討伐に参加した豊臣恩顧の武将の中には、関ヶ原の戦いでは西軍に属する者があってもおかしくなかったはず。しかし、上杉討伐に参加した豊臣恩顧の大名は全員、関ヶ原の戦いでも東軍に参加しています。そして、これに重要な役割を果たしたのが七将襲撃事件に参加した福島正則、黒田長政らの七将です。これは、奉行である石田三成を襲撃したからには、七将には重い処分が下されると覚悟していたところ、仲裁した家康は三成に非があったと認定し、三成の奉行職を解き佐和山城蟄居処分にしたほか、第1次蔚山城籠城戦後三成一派の軍奉行の報告に基づき行われた蜂須賀、小早川らへの処分を取り消し、当該軍奉行を改易にするなど、朝鮮の役に関して七将側の言い分を全面的に認める裁きをしたことが影響しています。これで七将は、次の天下人を家康と見立て、家康に臣従する決意を固めたと思われまゝ。その証拠に、その後、福島と蜂須賀家政は嗣子の正室として、清正は自らの正室として、家康の養女を貰い受け、家康と姻戚関係を結んでいます。また黒田長政は、上杉討伐出発直前に正室の蜂須賀家政の妹糸姫と離縁してまで、家康の養女（栄姫）を正室とし、家康と姻戚関係を結んでいます。これは、第1次蔚山城籠城戦後長政が秀吉から叱責されたのは、蜂須賀と姻戚関係にあったことから連座したとの思いが長政（および如水）にあったせいかも知れません。これもあって蜂須賀家と黒田家は長く絶縁

関係となり、蜂須賀家は、関ヶ原の戦いの際、徳川家から正室が嫁した嗣子至鎮は東軍に参加し、家政は西軍毛利に約2千人の兵を預ける（家政は病気を理由に参加せず）というおかしな行動をとることになります。それでも嗣子の至鎮を東軍に参加させ、毛利の指揮下に入っていた約2千人の兵も関ヶ原の戦い決着後速やかに至鎮の指揮下に入ったことから、関ヶ原の戦い後蜂須賀家は処分を免れます。

この他に、池田輝政は継室が家康の次女督姫ですから、秀吉亡き後は堂々と家康に味方できますし、加藤嘉明も次の天下人は家康と見立てた口です。このように上杉討伐に参加した七将は、次の天下人は家康と見立てて参加しており、三成が毛利輝元を総大将に担いでも寝返ることはありませんでした。それに加え西軍は、七将襲撃事件の動機となった殺したいほど憎い三成が実質的大将です。これは、東軍の主力たる七将にとって戦う強い動機となります。

一方西軍を見ると、宇喜多秀家と小早川秀秋は、元秀吉の養子で豊臣家に近いことから、小西行長・三成以外の3奉行・大谷吉継・福原長堯ら三成一派の軍奉行などは朝鮮の役での対立から、立花宗茂、長曾我部元親らは秀吉に大名に取り立てられた恩義から、西軍に就いたと考えられます。なお、島津義弘は、行きがかり上です。

このうち小早川秀秋は、西軍に就くのがおかしいほど、朝鮮の役での三成に対する恨みは大きいはずです。秀秋は、第1次蔚山城籠城戦で釜山浦城から救援に駆け付け、敗走する明・朝鮮軍を自ら先頭を切って追撃します。このことを後日軍奉行から、大将（左軍大将）としては軽はずみの行動であったと秀吉に報告されます。その結果秀吉は、秀秋を筑前名島から越前北ノ庄に転封し、筑前名島は三成に与える決定をします。三成が辞退したため、筑前は秀吉の直轄地とされ、三成が代官となります。処分となる報告をしたのが福原長堯ら三成と関係が深い軍奉行であり、朝鮮在陣の武将たちは、この処分は三成の我田引水の企てと見ていました。そのため秀秋は、三成を恨んでいたはずで、翌年家康がこの処分を取消し、秀秋は筑前名島の領主に返り咲いているのですから、当初西軍に就いたこと自体が驚くべきことです。しかし秀秋は、元秀吉の養子から毛利の両川（小早川家、吉川家）の片方の小早川家の養嗣子となったことから、豊臣家および毛利家への恩義も強く、このことから西軍についたのでしょう。その後黒田如水（秀秋の小早川家への養子を斡旋した）・長政親子が中心となって翻意させ、早い段階で東軍に寝返ることに決めていたと言います。

毛利輝元は、三成と親しくしており、朝鮮の役でも不利益な処分は受けておらず、三成に恨みもなかったことから、三成により西軍総大将に担がれます。慶長の役では、輝元の代わりに出陣した養嗣子の毛利秀元が右軍大将を勤め、清正もその下にいたことから、輝元からは清正に西軍に就くよう要請があったようですが、清正は「大和1国をくれるのなら考える」と承諾不可能な条件を出して、応じなかったと言います。毛利両川のもう片方の吉川広高は、第1次蔚山城籠城戦の際、救援隊到着後真っ先に救援に飛び出しており、清正が饗応して感謝を示した歴戦の武将ですが、吉川には、慶長の役で同じ右軍に属した黒田長政（おそらく如水も）が東軍に就くよう強く働きかけたようです。その結果吉川は、早くから東軍

に就くことを決め、関ヶ原で毛利軍が南宮山に布陣した際、先攻を勤める吉川軍が動かない限り後続の毛利秀元率いる毛利本隊は動けないことを利用し、吉川軍が動かないことによって毛利軍は参戦しなかったのと同じ結果を作り出します。歴戦の武将吉川には、実力者家康が率い、黒田、清正、福島など豊臣系の威勢の良い部将が就いた東軍の勝ちが見えていたと思われます。

立花宗茂は、東の本多忠勝、西の立花宗茂と並び称される勇猛な武将であり、朝鮮の役でも大活躍をしていたことから、家康・三成が共に味方に引き入れようと招聘工作をしたようです。家康は、筑前・筑後2国を与えるとの条件を出したとあります。宗茂の重臣たちは、次の天下人は家康と見立てて東軍に就くことを進言したようですが、宗茂は、「今があるのは太閤の取立てがあつてのこと」と西軍に就くことを決めたと言います。清正も2度の蔚山城籠城戦に駆け付け奮闘してくれた宗茂に大恩を感じており、天下の大勢は家康にあると東軍に就くよう説得したようですが、果たせませんでした。宗茂は、上京し大津城を開城させたところで西軍の敗北を知り、柳河に帰郷します。柳河では、息子の勝茂が西軍に参加していた鍋島直茂が家康から柳河城を落とせば許すと言われ、約3万人の兵で責め立てます。そのうち黒田如水と清正も到着し、鍋島の奮戦を家康に伝えることを条件に、鍋島軍の攻撃を止めさせ、宗茂に開城を勧めます。特に、朝鮮で宗茂に大恩がある清正は、身命を賭して家康から助命を得ることを約し、懸命に説得します。その結果宗茂は、清正の陣を訪れ、柳河城を開城することを告げます。その後清正は、家康から宗茂の助命を得、高瀬に住居を用意し、宗茂および正室閔姫を賓客としてもてなします。また立花藩家臣約200名を召し抱えますが、これは武田軍団を召し抱え井伊の赤備え軍団を作った家康の例に倣ったのかも知れません。その後立花宗茂は、京、江戸に上り長い牢人生活の後、1606年、本多忠勝の仲介により將軍徳川秀忠の相伴衆に召し抱えられ、その後陸奥棚倉1万石の大名となります。このまま牢人を続けさせれば、後の大坂の役で第二の真田信繁になったかも知れない宗茂を、わずか1万石で旗下に組み入れたことは、秀忠の英断かも知れません。宗茂は、1620年には柳河藩主に返り咲きますが、立花家の旧宗主大友の、小藩に分割されていた豊後41万石を与えてもよかつたのではないのでしょうか。

島津義弘は、伏見城に応援に入ろうとしたら敵扱いされたことから西軍に就いたと言われていますが、立花と島津は、慶長の役で小西と同じ左軍に属し、小西が海上封鎖により順天城を脱出できなくなった際、巨濟島から水軍を編成し駆けつけ、明・朝鮮水軍と海戦を行い、その間に小西を脱出させた仲間です。島津・立花が西軍に就いたのは、朝鮮の役での小西との結びつきがあつたことも大きな要因と思われます。

このように、関ヶ原の戦いは、朝鮮の役で不利益な処分をされた武将たちと不利益な処分となる報告を挙げた軍目付が所属する三成一派の決着戦でもあり、七将襲撃事件の延長戦とも言えます。現にこれと無関係な徳川方の武将は、井伊直政と松平忠吉しか参加していないのです。

尚、清正が上杉景勝討伐軍に参加せず、関ヶ原に参戦していないのは、上杉討伐出立前に

起きた薩摩藩の内乱である庄内の乱において、家康が大老として仲裁していたところ、清正が密かに反乱軍を支援していたことが分かり、家康から不信感を持たれていたためです。出立前、清正は家康に上杉討伐軍への参加を懇願していますが、家康から九州に留まるよう命じられています。このときは、関ヶ原の戦いは想定されていませんから、九州の西軍に備えるためではありません。

三成が家康討伐の旗を挙げたときには、清正は家康に東軍に馳参じると伝えたようですが、家康から九州の西軍を叩くよう要請され、熊本に留まります。清正の戦いぶりを見ると、小西の宇土城は、開城まで約3週間もかけていますし、その後駆けつけた柳河城では、開城するよう宗茂を全力で説得しており、本気で戦った様子はありません。清正にとって、本気で戦う敵は、三成と小西だけであり、この両名が関ヶ原で討たれたことにより、戦う動機はなくなっていたと思われます。宇土城攻めには、朝鮮で小西軍に属したキリシタン大名の有馬晴信、大村喜前、キリシタンに理解があった松浦鎮信の参加を許し、東軍に就いた証を作らせ、改易を逃れる手助けをしています。また、宇土城に籠ったキリシタンで小西の重臣内藤如安は、朝鮮で小西らが明と嘘で固めた和議交渉を行った際、小西らが作成した秀吉の偽の降状を持ち北京に交渉に就いており、清正にとっては極めて忌まわしい人物でありながら、宇土城開城後は食客として招いています。清正は、大将を憎んで部下を憎まずの人であったようです。このように、清正は、先輩（如水、鍋島直茂など）を立て、同輩と対等に接し、後輩を大事にすることから、各年代のリーダーに好かれ、その上のリーダー（まとめ役）に担ぎ上げられる人物だったように思われます。

（４）家康と島津との講和

慶長5年（1600年）11月3日に柳河城を開城させた清正、如水、鍋島直茂は、立花宗茂も伴い、肥後と薩摩の国境付近まで移動し、家康からの侵攻命令を待ちますが、慶長5年（1600年）11月12日家康は、逆に侵攻中止命令を出します。清正らの軍は5万人を超える動員力があり、それに東軍の援軍が加われば勝利間違いないのに、なぜ家康は侵攻中止命令を出したのでしょうか？

先ず、西軍に参加したのは、島津義弘の約15百人の兵のみであり、領主である兄義久は参加していないばかりか、義弘から追加の派兵要請があっても応じていなかったこと、関ヶ原の戦いで敗戦後逃げ帰った義久は剃髪謹慎していたこと、など島津側に情状の余地があったことがあります。

それ以上に、家康としては、関ヶ原の戦いで混乱した国内の状況を長引かせたくない外憂があったからです。それは、朝鮮・明軍の日本侵攻です。

秀吉の死により朝鮮から撤退し終えたのは、慶長3年（1598年）12月であり、薩摩領侵攻中止となったときには、まだ2年しか経っていませんでした。朝鮮からの撤退に当たっては、朝鮮の倭城が明・朝鮮の大軍の一斉攻撃を受け、やっと逃げ帰ってきたというのが実情でした。関ヶ原の戦い終結時点でも、明・朝鮮との和議は成立しておらず、このまま国内の混乱が続けば、これに乗じて明・朝鮮軍の日本侵攻も考えられました。清正が巨大で

強固な熊本城を築いたのは、明・朝鮮軍の侵攻に備えたものです。また、池沼（現大濠公園）と川（那珂川）と堀に囲まれた、湖上の要塞の様相を呈する黒田如水・長政が築いた福岡城も、明・朝鮮軍の侵攻に備えて築かれた城です。福岡城は、朝鮮の役で日本軍が攻城に苦戦した朝鮮の晋州城を手本にしたという説がありますが、私には、水攻め後の備中高松城のように思えます。福岡城と城外を結ぶのは、三つの橋のみであり、完全に籠城に徹した城です。福岡城も薩摩への備えという説がありますが、清正同様如水も、薩摩は籠城戦に徹しなければならないような敵だとは思っていません。実石高もほぼ同等であり、負ける相手ではないかと思っていなかったはずです。清正は、福岡城を見て「熊本城は3日、4日しか持たないが、福岡城は30日、40日もつ」と言ったそうですが、如水や清正がこれだけの籠城戦になることを考える相手は、朝鮮で相まみえた明・朝鮮軍しかありません。福岡城は、元寇ならぬ明寇に備えた城だったのです。

また、関ヶ原の戦いの論功行賞で家康が九州に黒田、細川、加藤、鍋島、田中吉成と大身大名を揃えたのも、明・朝鮮軍の侵攻を考えてのことと思われまゝです。例えば、黒田と細川は、両者の懐柔のみを考えれば、黒田には出身地の播磨に近い備前を、細川には京に近い丹波・丹後・若狭あたりを与えることが考えられます。しかし、明・朝鮮の侵攻を考えると、最初の防衛拠点となる筑前博多は、小早川では心もとなく、黒田親子を置きたくなりますし、その西隣の豊前小倉には、毛利の監視も兼ねて、豊臣恩顧の大名の中では高虎に次ぎ家康の信頼が厚い細川を置きたくなります。これにより、明・朝鮮の侵攻には、黒田・細川・鍋島・田中・清正が協力して対抗する強力な体制が出来上がりました。

このように家康にとって、国内の安定は、明・朝鮮軍の侵攻に備えるために不可欠であり、そのため、島津とは全面譲歩の講和を選択したのです。

そもそも、関ヶ原の戦いに入るまでは、家康と島津との関係は悪くありませんでした。家康は慶長5年（1600年）3月まで約1年続いた島津藩の内乱（庄内の乱）を仲裁していますし、上杉討伐に向かう直前の慶長5年（1600年）5月には、島津が慶長の役の洒川の戦いで大勝し、和議を求めて明が差し出し、島津が京で保護していた人質の明人矛盾科について、家康は、明との和議のため、島津義久に対し、明に返還するよう要請しています。家康は、上杉討伐に遠征するに当たって、明の動きが気になっていたものと思われまゝです。これを受け入れた義久は、明貿易に精通した坊津の豪商島原宋安に命じ、矛盾科を明に送り届けさせます。その結果、明の皇帝は大変喜び、薩摩と明の間で双方年2回貿易船を派遣し合うこととなりました。実質的な日明貿易の再開です。これを受け、慶長6年（1601年）5月、明の貿易船が薩摩の坊津に向かったのですが、これが奄美大島付近で日本の海賊に襲われ、乗船者は全員殺され、船は焼かれるという事件が起きます。これは、堺の商人伊丹屋助四郎が企てたもので、驚いた島津藩は、伊丹屋助四郎と海賊たちを捕らえ、磔の上のうえ処刑し、首を明側に届けて謝罪し、貿易の再開を要請しましたが、怒った明は応じませんでした。これは、日明貿易の再開とともに明との和議を期待していた家康にとっても大きな誤算となりました。家康側は、この襲撃事件は、明の脅威を大きくし、家康との講和交渉を有

利にするために、島津が黒幕となって起こしたのではないかという疑いも持ったようです。この結果、家康側は、明・朝鮮軍の日本侵攻および明と島津の結託の可能性も考えなければならず、島津との講和交渉を長引かせることはできなくなりました。これにより島津は、明カードの重要性を改めて知ることになり、この後1609年には琉球王国に攻め入りこれを属国化し、間接的に明貿易で利益を得ることになりますし、徳川幕府に対して島津の存在感を増大させることになりました。